

第Ⅱ章 城下町角館の位置と歴史的環境

第1節 角館の位置と立地

秋田県の内陸部中央に位置する仙北市は、平成17年（2005）に、角館町・田沢湖町・西木村の2町1村が合併して誕生した人口およそ23,800人余り（令和5年3月末現在）の市である。

南北約47km、東西約30kmの広大な面積を有し、市域の東辺は岩手県に接し、中央部には水深日本一を誇る田沢湖が美しい瑠璃色の湖水を湛えている。市の南半（旧角館町及び旧田沢湖町・旧西木村の一部）は秋田県の穀倉、横手盆地の北端部にあたる。

江戸時代に、火除けが設置された城下町角館は、横手盆地の北端部ながら、微視的には東側の奥羽山脈や西側の太平山地から派生した山地がやや迫った場所にある。角館の周囲には、古城山や田町山、大威徳山^{だいいとくさん}など、平地との比高差が30～100mの残丘状の小山が散在し、それらの南側で玉川が桧木内川と合流し南下している（巻頭図版1、第1図）。

第2節 角館の歴史的環境

1 佐竹氏の転封と芦名氏の時代

関ヶ原の戦いを制した徳川家康は、支配体制を確実なものとするため、大名等の諸豪族を大きく異動させた（転封、所領没収等）。この対象になった大名の代表格が清和源氏の嫡流たる佐竹氏（佐竹義宣）で、慶長7年（1602）、常陸太田50万石から秋田20万石に転封された。佐竹氏の転封と引き替えのように、それまでの秋田県内の各大名は、秋田氏が常陸の宍戸5万石に、戸沢氏が松岡4万石に、六郷氏が中村2万石に、本堂氏が新治8千5百石に異動した。秋田・仙北に転封された佐竹氏は、先ず領内の安寧・秩序保全と民心の安定を図るため、重要な地に実力のある重臣を配した。角館においては、須田美濃守盛秀が7月に入り戸沢氏の留守居役から角館城を受け取った。盛秀には、茂木百騎と呼ばれて、もともと下野国茂木の本町^{もとまち}に居住していた家臣団が同道し、戸沢氏の城下町であった旧田沢湖町神代本町に入った。

須田美濃守は翌4月には横手に移り、代わりに芦名平四郎義勝が角館城（第1・6図①）に入った。義勝はもともと佐竹義宣の弟で、会津芦名180万石に養子に入っていたが、天正17年（1589）米沢の伊達政宗に敗れ、常陸に帰った後、龍ヶ崎城主となっていた。そして、佐竹義宣の転封に伴い同行して秋田に入り、慶長8年（1603）に1万5千石の知行地を与えられ角館城に入ったのである。角館の実質的な城主となった芦名氏の当初の家中は、会津・江戸崎時代の譜代や佐竹・戸沢衆など、家来100～102人、部屋住み14人、歩行26人、足軽114人の250名余りで、これにそれぞれの家族を合わせると1,000名は超える大所帯であった。

芦名氏は角館に入っても、城構えなどは戸沢氏の時代とほとんど変えなかったものとみられる。しかし、元和5年（1619）6月に、大洪水のために大手門から城下町に至る院内川に架かる橋が流され、武士13人が溺死するという惨事が起こった。また、幕府からの城の破却令もあり、芦名氏は、これまでの狭くて水害等に対して不安の残る城下町（本町）（第1図）を、城の反対側に移すことを復興事業として始めることとした。

移転前の城下町は、城の東側（城廻）から現在の国道105号線の院内川に架かる本町橋を渡ったところに広がっていたが、その規模は不明である。しかし、芦名氏の大所帯に今宮摂津守とその組下が加わり、さらに商人等も合わせると相当なものであったと想像され、新たな城下町も相応の規模が必要であったと思われる。移転事業は、元和6年（1620）に始まり終了がいつであったか不明であるが、よほど急いだ感がある。移転先は、北が角館城（古城山）、西が鈴木内川、東が花場山・丸山・田町山、南が玉川に囲まれた、南北約2,000m、東西300～500mの細長い平地であった（第1図）。

角館城の本丸から、南眼下に町割の様子を眺めていた芦名氏は、中城に移る。この中城の位置は不明であるが、その後は古城山の南麓に移った（第6図②）。

しかし、実質的に現在の仙北市角館伝統的建造物群保存地区を主とする城下町を造った芦名氏は、継嗣の不慮の死などによって、わずか3代51年で家系が断絶した。

2 佐竹北家の時代

芦名氏断絶の後を承けて、明暦2年（1656）8月3日、所預として、北家佐竹義隣が芦名邸（第6図②）に入った。北家は、佐竹氏が常陸（茨城県）にあった時代の、16代義治の三男義信を祖とし、分流して宗家の居城である太田城（常陸太田市）の北に居を構えたので北家と称された。角館着任後の北家は、佐竹一門として藩政にも重きをなし、明治の廃藩に至るまで11代200年余りに亘って角館地方を統治した。

江戸時代も半ばになると秋田藩においても様々な文化が開花し、中でも武家の子弟に対する教育熱は高まった。このような状況を受けて久保田（秋田市）には寛政元年（1789）藩校（初めの名は明道館、後に明德館となる）が設置され、さらに藩内の主だったところには分校である郷校が置かれることとなった。角館にも、寛政5年（1793）弘道書院が開設された。開校当初は校舎が無く北家邸の一室を充てていたが、寛政10年（1797）には東勝楽丁に校舎が落成した（第6図⑤・8図）。これより多くの家塾が次々と開設され、更に学問とともに芸術や文化の面でも優れた人材を輩出し、やがて角館は文教の地と呼ばれるようになっていく。

3 明治から今日まで

慶応4年（1868）より始まった戊辰戦争において新政府軍に与した久保田藩は、旧幕府軍の攻撃に遭い、院内・湯沢・横手・角間川・大曲という久保田藩領の内、雄勝・平鹿の2郡全域



と仙北郡南半が制圧され、次の戦略目標が角館となる。旧幕府軍を迎え撃つ角館軍には応援に駆けつけた肥前鍋島藩・大村藩・長州藩・小倉藩・平戸藩等の精鋭が加わり、彼らは町内の大きな商家に分宿し角館の武士と作戦を練った。鉄砲・大砲・それに洋服でゲビロという太鼓を叩いて突貫するという西洋風の訓練法で、町の人々は目を見張ったらしい。僅か 15 才の大村藩士 濱田^{はまだきんご}謹吾（第 9 図）は、火除け（第 1・6 図）でゲビロを叩いて稽古をしていたという。

同年の旧暦 8 月 28 日正午、勢いに乗じた旧幕府軍は鶯野に本陣を構え、玉川の対岸から岩瀬川原（第 1 図）の角館軍に鉄砲を撃ち込み、戦いの火蓋が切って落とされた。角館軍は前もって玉川沿いと大威徳山に台場を築き応戦した。大村藩の一隊が玉川を渡って押切に上がり敵の側面を突いたため、旧幕府軍は足並みが乱れ、日の暮れる頃には豊川方面まで撤退した。

明けて 29 日、決戦の日を迎えた。玉川を越えられるということは角館軍の敗北を意味する。午前中より旧幕府軍が逆襲をし始め、別動隊を白岩から広久内に分け、手薄だった対岸の中川原、下川原へと渡河作戦に出る。兵力の少ない角館軍は苦戦に陥り、多くの戦死者を出す程の激しい攻防戦となったが、平戸藩と新庄藩の応援があり、正午には玉川渡河を断念させたばかりか追撃戦に入った。小高い山に囲まれ、かつ、桧木内川と玉川が堀の役割を果たし、天然の要塞となったということもあり、角館は戦火に遭わずに済み、美しい町並みが守られた。

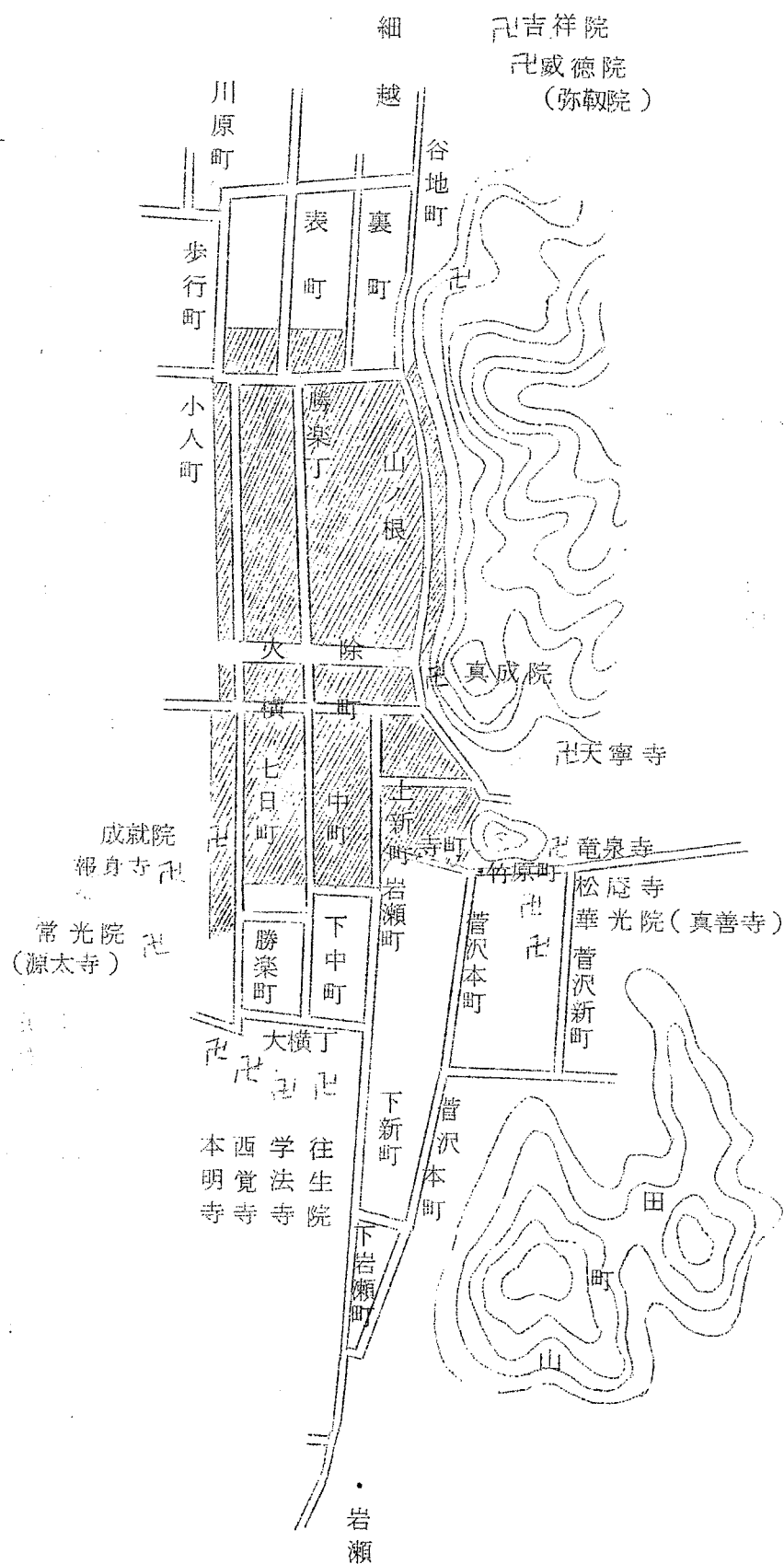
『角館誌』第五巻（「角館誌」刊行会 1973）によると、「明治三十三年五月二十日午前一時四十分頃上新町（天寧寺門前丁勘九郎宅）から出火。折柄の強風に乗った火の手はまず天寧寺門前丁をひとなめにし、火の子は報身寺へ飛んでこれを焼き、上新町・中町・西勝楽町・七日町・横町・小人町・東勝楽丁を全焼してさらに山根・歩行町・表町下丁に及んでようやく鎮火。この間に桧木内川を飛び越えた火の子は対岸小勝田部落の農家数戸に延焼した。ある記録には小勝田部落七戸を類焼したとある。旧角館町記録によれば、上新町二六世帯百三十五人、横町六八世帯三百四十四人、中町三三世帯百五十三人、七日町四三世帯百八十人、山根町三七世帯百五十人、東勝楽丁三〇世帯百五十四人、小人町一七世帯百一人、表町下丁九世帯三十六人、歩行町六世帯二十五人、裏町半焼一戸で合計二六九世帯、罹災人員千二百七十九人、土蔵三八棟、木造倉庫五四棟、焼死者二人、負傷者数人、公共建物は前記の通り役場・角館小学校・警察分署・郵便局と報身寺・成就院・薬師堂を失った。」とあり、これは角館の近代において発生した火除け地も含めた大火災であった（第 7 図）。

戦後の昭和 30 年（1955）、角館町・中川村・雲沢村・白岩村の 4 ヲ町村が合併し、新角館町が誕生し、庁舎を中町に置いた。昭和 36 年（1961）、角館町役場が角館町東勝楽丁 18 番地に落成した（附図 1）。平成 17 年（2005）、角館町・田沢湖町・西木村の 3 ヲ町村が合併し、仙北市が誕生した。令和 2 年（2020）、仙北市角館庁舎が仙北市角館町中菅沢 81 番地 8 に落成し、翌年の令和 3 年（2021）、火除け地内に所在した仙北市東勝楽丁庁舎・西側庁舎・公用車車庫（附図 1、第 10～12 図）を解体した。

圖表第十

明治三三年五月二十日大火図

二百六十二 軒燒失



第7図 明治33年の大火による消失範囲（小勝田を除く） 斜線部が消失範囲
『角館町消防沿革火災年表略譜』（角館町消防団1978）



第8図 平成27年 弘道書院跡の
発掘調査風景



第9図 大村藩少年鼓手濱田謹吾の像



第10図 火除け地にあった
仙北市東勝楽丁庁舎（旧角館町役場）



第12図 火除け地にあった公用車車庫（左）



第11図 火除け地にあった
西側庁舎（旧角館公民館）

〔挿図出典〕

第7図：角館町消防団 1978 『角館町消防沿革火災年表略譜』（22頁）

第8図：仙北市教育委員会 2017 『弘道書院跡－角館郷校弘道書院跡復元検討に係る発掘調査報告書－』 仙北市文化財調査報告書第1集（図版11-2）

〔引用・参考文献〕

「角館誌」刊行会 1965 『角館誌』第二巻

「角館誌」刊行会 1967 『角館誌』第三巻

「角館誌」刊行会 1973 『角館誌』第五巻

角館町 1995 『あゆみ 昭和30年から平成7年』

角館町 2005 『角館町合併50周年記念並びに角館町閉庁式』

角館町教育委員会 1964 『角館の歴史』

角館町教育委員会 1999 『戊辰戦争130年 in 角館「いま戊辰戦争を問い直す」報告書』

角館町教育委員会 2001 『天然記念物角館のシダレザクラ緊急調査報告書』

角館町消防団 1978 『角館町消防沿革火災年表略譜』

仙北市教育委員会 2009 『仙北市角館伝統的建造物群保存地区保存計画』

仙北市教育委員会 2015 『ふるさと仙北学』

仙北市教育委員会 2017 『弘道書院跡－角館郷校弘道書院跡復元検討に係る発掘調査報告書－』 仙北市文化財調査報告書第1集